

哲學研究

第百八十二號

第十六卷
第五號

マックス・ウエーバーの社會學方法論

——理念型論を中心として——

重 松 俊 明

は し が き

マックス・ウエーバーが西南獨乙學派の科學方法論に負ふところが甚だ大きいといふことは彼の科學論を一見して誰しも感ずるところであらう。ウエーバー自身 *Rascher's historische Methode* に於て「私は専ら可成り忠實にリツケルトの以前に引用された著書 *(die Grenzen)* の本質的な見地に——それがわれわれにとつて重要である限り——依つて來たと信ずる。リツケルトの思想の我々の科學の方法論にとつての使用可能性を検討することがこの研究の目的の一つである。」と述べ概念構成それ自體の區別——個別的・普遍的的方法——は根本原理的なものであつて、方法論的見地の下に於ける科學のあらゆる分類はこの區別を顧慮せねばならぬと主張してゐる。又リツケルトも歴史を科學として確立せんとする試みに於て、彼とウエーバーとは恰も若き青年の如く精神的に結ばれたと述べてゐる。 (*Rickert; die Grenzen, Vorwort XIX.*)

かくの如き事情からウエーバーの文化科學論を西南獨乙學派の方法論によつて基礎づけんとする多くの試みが現れた。

然しリツケルトは正當にグレンツェンの序文の中で云つてゐる「ウエーバーはゲーテと共に語るならば科學的には如何なる流派にも屬さない。」と。さうして、なほリツケルトと共に語るならば「ウエーバーの科學的な偉大さは次の點に存する。即ち彼は歴

史と組織學との結合に於て他の如何なる方法論的圖式にも適應しない一つの文化科學を創出した。かくて特殊科學に新らしき展望を示した。」

而してリツケルトの言葉は充分正當であらう。私は本論文に於ては、多くの人に做つて、ウエーバーの方法論を西南獨乙學派の立場から徹底的に根據づけんとするものではない。又テイルタイの哲學により近く結びつけんと意圖するものでもない。むしろ、私はリツケルトの表現を借りれば「ウエーバーの創出した如何なる方法論的圖式にも適應しない一つの文化科學」を忠實に理解することによつて、それがわれわれの社會學にとつて、また將來發展せしめらるべき我々の社會學に對して如何なる新しき展望を約束するものであるかと云ふことを論究の眼目と爲さんとするものである。

第一章 歴史的社會的現實態と文化科學

一、立場の意義

一、價值理念と文化意義

一、文化科學と自然科學

一、社會現象の文化意義

一、文化認識に於ける概念體系化の無意味なること

第二章 文化に於ける普遍的なるもの

一、自然に於ける「普遍的なるもの」と文化に於ける「普遍的なるもの」

一、文化に於ける普遍的なるもの——相對的歴史的概念

一、類概念と相對的歴史的概念

一、絶對的歴史の個性的なるもの

第三章 理念型論

一、歴史の因果歸屬

一、「客観的可能性」—「十余なる因果惹起性」

A、理念型の「構成」「性質」「用途」

イ、構成

ロ、性質——生成的性格

ハ、用途

1、意味解釋の圖式として

2、發見的價值を有すること

3、叙述上の用途

B、ウエーバー社會學に於ける理念型

ウエーバー社會學の對象

社會學的規則即社會學的理念型

C、理念型を分類することについて

ヒポテーゼと理念型

D、理念型による文化認識の客観性

第一章 歴史的社會的現實態と文化科學

我々を圍繞する歴史的社會的事象はこれをその直接に與へられた姿のまゝで受け取るならば實に絶對的に無限なる多様性として現はれる。その一斷片を取り出してこれをその個性的要素に於て單に記述せんとする試みすら律氣に盡して行は

んとするならば内包的には尙無限の残りを保存してゐるであらう。有限なる人間精神による無限なる實在の思惟的認識は、それ故に、常に暗黙の裡に實在の限られたる部分が科學的把握の對象となり、この有限なる部分のみが「知る價值ある」ものとして本質的であらねばならぬと云ふことを前提としてゐるものである。従つてわれわれが歴史的社會的現實態を科學的に把握せんとする場合には、常に必らずその有限なる一部分が取り出されねばならぬ。

然らばこの有限なる部分は如何なる原理によつて選び出され得るか。凡そ一般に選擇と云ふことが可能であるためには、我々が對象に對して取る何等かの立場(Standpunkt)といふものが豫想されてあらねばならぬ。一定の立場が確立されて始めてこの立場にとつて本質的なるもの、或は非本質的なるもの、重要なるもの、或は重要ならざるものといふ選擇が可能となつてくる。

歴史的社會的現實在に對する文化諸科學の持つ立場としては、宗教的、經濟的、法律的、社會的等種々の立場が存在するであらうが、これら諸々の立場は、何れも現實在を全體としてその絶對的無限の多樣性のまゝ受けとるのでなくて、夫々の固有の立場から現實在を貫いて、その有限なる部分を抽出し、以て自己の對象と爲してゐるもの

であり、その意味に於て、かゝる一定の立場よりする考察は所詮一面的たるを免れることはできない。とは云ふものゝ、この一面的性質は何等非難を受くべきいはれを持つてゐない。否、むしろ、少なくとも科學的たらんとするならば必然的にそれは一面的たらざるを得ないのである。人或はこれに反對して云ふであらう。歴史的社會的現實態を考察するに當つては、自己の立場を何か「社會的なるもの」[das Soziale]にまで擴大し以て文化諸科學の持つ一面性を救ふことが進み行く科學の任務ではないかと。併しながらかゝる考へ方は「社會的なるもの」といふ立場は、何か特殊な内容的賓辭 inhaltliche Prädikat を付與されるならば、科學的問題の限界づけに對する充分なる限定性を得るものであると云ふが如き方法論的誤謬を犯してゐるものである。若しかくの如き立場が許されるとするならば、それは言語學も、教會史も、經濟學も、人間の文化生活の最も重要な構成要素たる國家から、その規範的規則たる法律を取り扱ふ科學に至るまで、ありとあらゆる科學を包括する事になるであらう。かくの如きものを、なほ科學と稱し得るであらうか。否、それは良き意圖を以てはあつたが無反省的に營まれたコントを以て始まる綜合社會學が百科全書的であると攻撃され、一つの大きな壺の中にあらゆる歴史的、心理學的、規範的諸科學を投げ込んで、この

壺に社會學といふ標札を貼つた¹⁾とジンメルによつて揶揄的に批評された有名な
 レッテル社會學(Etikett Soziologie)に類するものを再び企てることになるであらう。
 かくの如き仕方を以ては、何等新らしき科學の成立を期待する事はできない。「科學
 の研究領域の基礎となるものは、事物の實質的聯關ではなくて、問題の思维的聯關で
 ある²⁾」即ち「社會的なるもの³⁾といふが如き立場に立つてこれに特殊な内容的賓辭を
 付け加へることによつて科學的問題の設定、更には特殊科學的領域の限界付けが充
 分に規定されるといふが如き實質的聯關(sachliche Zusammenhänge)によつて、科學的問
 題は規定されるのではなくて、或一定の特殊の立場より歴史の社會的現實態を貫い
 てその有限なる部分を抽出するといふ思维的聯關(gedankliche Zusammenhänge)による
 ものである。ジンメルもかく主張して云ふ⁴⁾「あらゆる科學は一つの抽象に基いてゐ
 る。この抽象たるや、われ⁵⁾が統一態としては如何なる科學によつても把握する
 ことのできない事物の全體性を、その一側面より、或概念の立場から考察するもので
 ある⁶⁾」デイルタイの言葉を借りるならば、あらゆる科學は歴史の社會的現實態から
 部分内容を抽離するといふ技巧によつて成立する⁷⁾即ち社會的、歴史の現實の一
 部分が研究領域として明らかに或は暗黙の内に選擇され、分析され、敘述されるに當

つて前提されるところの一面的立場を離れては、文化現象の科學的客觀的分析は存在し得ないのである。

「われわれが營まんとする文化科學、または社會科學は「實在の科學」である。即ちそれはわれわれを圍繞する現實在をその文化特性に於て考察せんとするものであり、かゝる社會科學は一方に於ては實在の個別的現象の聯關及び文化意義をその現在の狀態に於て他方その歴史的成果に於て理解する。即ち謂はゞ因果歸屬を行ふものである。」

然らば歴史的社會的現實態をその文化意義に於て認識するとは如何なることを意味するか。それはかゝる現實態を價值理念との關係に於て觀ることである。抑、文化なる概念は一つの價值概念である。それは經濟的實在の要素の中でこの價值理念との關係によつて意義を有するに至るものを總て包括する。ウエーバーの言葉によれば「文化なるものは意味なき無限なる世界事象から人間の立場より意味と意義とを以て考へられた有限なる截片である。」(W. I. S. 180.)

註 世界事象そのものは意味なきものとするならば、如何にしてそれは意味の世界と結びつき得るかといふことが問題になつてく

る。このウェーバーの思想には原理的批判が當然加へらるべきであらうが、こゝ暫くは我々はたゞウェーバーに聴くことのみ
に努めやうと思ふ。

個別的實在の些々たる細片もこの價值によつて制約された關心又は價值理念と結合する立場によつて選り出されて染色される所に始めて文化意義を所有するに至る。その限りに於てのみそれは文化科學的認識價值を持ち得るものであつて、決して現實態の何か無前提的把握によつて意義を得るものではない。むしろ何物か々研究の對象となるためにはこの『意義あるもの』が確立されるといふことが已に前提されてあらねばならぬ。而してかゝる『意義あるもの』が確立されんがためには、それ自體經驗的素材からは決して出て來ない——ウェーバーによれば——ところの價值理念と結合するかの立場が前提されてあらねばならぬ。こゝに科學的問題の限界づけに當つてその實質的ならざる思惟的聯關が主張されねばならないのである。

こゝに至つてわれわれは文化科學と自然科學との判然たる區別に到達することができる。こゝに於て見るに、ウェーバーもやはり西南獨逸學派の科學方法論を一

應は受け容れてゐるものゝ如くである。然しながらウェーバーはリツケルトの如き單なる論理主義者ではなかつた。ウェーバーが價值理念と云ひ文化意義と云ふも、それはリツケルトの意味するが如き形式的超越的價值に比すれば遙かに隔りがある。5)

われわれは文化領域に於ても何か自然科學的法則的なるものが科學的に本質的なものであるといふ通常の考へ方を常住戒めてをらねばならぬ。即ち何か法則的なるものを個性的實在から抽出して法則體系を造り、この體系によつて把握できないものは將來この體系の發展とともに克服さるべきものであるか、然らざれば偶然的なるが故に科學的には非本質的なものである。従つて文化實在がそれへ還元され得るところの法則體系を作ることが文化認識の窮局の理想である。といふが如き思想は徹底的に排斥されねばならない。何となれば、文化意義の見地よりして *das Bedeutsame als solches* は *das Gesetze als solches* と決して一致するものではない。換言すれば實在に意義を與へるところの價值理念へ實在を關係せしめ、かくして染められた實在の諸要素をその文化意義の立場に照らして取り出し、秩序づけるといふことは實在を法則に分析し、普遍概念の下に秩序づけるといふことゝは原理的に相

異つた見地であり、この兩様の實在の思惟的秩序づけの間には如何なる必然的論理的關係も存在しないのである。例へば心理學か又は何かその他の自然科学的方法によつて、人間の協同生活の過程が何か最後のな窮局の因素に基いてよしや分析される事が自然科学的に可能になつたとしても、それによつて歴史的社會的具體的現實態は汲み盡されるものではない。生活現象のかゝる究極的要素への還元は文化科學的には元來不可能な事である。これは勿論方法論的見地から主張され得る事であつて、その根據として、生活現象には何か神祕的な *Entelochie* がひそんでゐるからとか或は生活現象は法則に還元できる程しかく法則的に經過するものではないからであるとか主張する必要はない。それは生活現象それ自體の問題であり、形而上學的問題である。ウェーバーの見解によれば歴史的社會的現實態の認識に當つてわれわれの問題とする所は、かの假說的因素が歴史的に重要な文化現象にまで結合するその状態 *Konstellation* である。故にこの個性的結合態を因果的に説明せんと欲するならば、われわれはそれに先行する全く同様に個性的な他の結合態に返つてこれを把握せねばならないのである。(W. I. S. 174) 言葉を換へて云へば、或る個性的状態は常に勿論因果的にはそれに先行せる同じく個性的なる他の状態の結果とし

て説明されねばならない。われわれが過ぎ去りし遠い灰色の霧の奥に何處まで廻航して行かうとも、かくの如き歴史の現實在の状態は尙無限の彼方に依然として個性的状態として、何か究極的因素又は法則へは決して還元されない個性的状態として止り續けて行くであらう。現在より、より少ない個性的性格を持つた或は全く個性的性格を持たない歴史の實在の謂は、根源的状态を考へることは全く無意味なことである。こゝに自然科学的法則の意義の限界が示され、この限界の確立はまた即ち文化科學的考察方法の決定的特性を示すものである。われわれが歴史の社會的事象をその個性的状態に於て把握するといふことは即ち文化意義に於て理解することを意味し、文化意義に於て理解するとは、價值理念に關係づけて觀るといふことを意味する。かるが故に文化現象の持つ意義は如何に完成せる法則概念からも演繹され得ないものと云はねばならぬ。

然らば歴史の社會的事象を文化意義に於て認識するとは具體的にウェーバーに於ては如何なることを意味してゐるのであるか。

例へば貨幣經濟的交換といふ社會現象の持つ文化意義は、貨幣經濟的交換は集團

現象 (Massenscheinung) として現はれる」といふ點に存し得る。而してこの集團現象は今日の文化生活の一つの基本現象であるが、交換が集團現象としてその役割を果すといふ歴史的事實は、その文化意義に於て理解されその歴史の成立に於て因果的に説明されて始めて明らかになる。かゝる説明に當つて極めて抽象的な交換一般の概念——一種の法則的知識——は説明の前仕事とはなり得ても、これによつては今日の貨幣交換の文化意義は決して把握され得ない。然らば貨幣交換が集團現象として現はれるといふことは如何なることを意味するか、交換を偶發的交換 (Zufälligen Tausch) と市場交換 (Marktaustausch) とに分類するならば、前者は交換の最古の形態であつて今日の經濟に於ては決して支配的な交換形式ではない。かゝる時代にあつては生計の重心點は自己充足にあつて、其處では餘剩物が偶發的に交換されたに過ぎない。これに反して、市場交換は全然交換のために供給せられ、同時にまた全然そのために需要されるといふ事情即ち市場可能性 (Marktmöglichkeit) の存在によつて方向づけられるものである。次に貨幣經濟に至つて一層この市場可能性が擴張され、これは交換を場所的・時間的に分離されたまゝ可能ならしめ、將來の市場状態を豫想することによつて交換をその刹那的状态より解放する。こゝに於て他人も亦交換に

參加するであらうといふ期待 (Erwartung) による市場可能性は極度にまで擴張されることになる。6) かゝる歴史的状態のもつ文化意義は、かゝる歴史的状態に現はれるものであるが、それは交換一般の概念の確立、またその技術的研究からは到底説明さるべくもない。それは歴史的個性的状態をその文化意義に於て把捉せんとする科學によつて始めて問題として取扱はれもするし、また解釋もされるのである。

註 誤解を防ぐために蛇足を加へるならば、社會現象を價值理念との關係に於て見る、或は文化意義に於て認識する、或はリツケルに依つて價值關係的に見るといふことは決して *das Wertvolle*, *das Wertgemisse* のみが、文化意義に歸せられるといふことではなく *das Wertwidrige* も亦尙價值關係的であるといふことである。故に後に述べるが如く教會の理念型も存在すれば娼家の理念型も存在し得るのである。「賣淫も、宗教も、貨幣もそれらの歴史的にとる所の存在形式が我々の文化關心に直接に或は間接に接觸する限り、即ち賣淫、宗教、貨幣等の概念に於て考へられる所の實在の斷片を意義あるものとなすところの價值理念から導き出される立場の下に於てわれわれの認識衝動を刺戟する限り、その限りに於て、賣淫も宗教も貨幣も等しく文化現象である。」(W. L. S. 181.)

上述の如く文化實在の認識は常に一定の特殊の立場に基く認識であり、文化實在の無前提的把捉は決して科學的でもなく、また客觀的でもない。我々は實在の有限なる部分をかゝる價值理念に照らし取り出さねばならない。かゝる價值理念は特殊の意味に於て主觀的であり、我々の認識の前提をなすものである。かくて文化科

學的勞作に「人格的なるものが侵入して來るといふことは否むべからざる事實である。研究家の價值理念なしには如何なる素材選擇の原理も與へられない、従つて個別的現實在の意味に充ちた認識も存在し得ないのである。だが併し、文化科學的認識に當つて「人格的なるもの」が必然的に侵入して來るといふこと、またかの價值理念が特殊の意味で主觀的であるといふことは、人々が氣隨に振舞ふ恣意と解されてはならぬ。恣意の振舞ふところには勿論科學は存在し得ない。即ちそれは甲には妥當し、乙には妥當しないといふ意味での主觀的と解されてはならないが、或る事象が甲の關心をそゝり、乙の關心をそゝるその程度の種々の相異はこれを承認しなくてはならないであらう。このことは文化科學的認識の客觀性と矛盾するものではない。「たゞ併し、何が研究の對象になるか、何處までこの研究は因果聯關の無限の中へ伸展するかといふことは、研究家及びその時代を支配する價值理念によつて規定される」(W. I. S. 181.) ウェーバーの云ふかくの如き價值理念はリツケルトの云ふ形式的超越的價值とは著しく異つてゐる。我々の營む科學は經驗科學である。「經驗科學が個人に教へ得ることは、彼が何を爲すべきかではなくて、彼に何ができるか、何を意欲するかといふことである」(W. I. S. 151.) かくる意味での經驗科學はリツケルトの云

ふ「體系的限界づけの可能性を與へ」それへの關係づけが個別化的敘述を可能ならしめる」といふが如き、内容的には極めて空虚な「價值體系」は與り知らぬところである。價值體系を一つの理念として前提することは歴史哲學、價值哲學の問題ではあり得やう、だが併し少なくとも經驗科學の問題ではない。ウエーバーに於ては *Was der Geschichte* は問題ではなくて *Wie der Geschichte* が問題である。かるが故にウエーバーは云ふ。「かゝる價值の妥當性を評價することは信仰の事柄であつて、生及び世界をそのの意味に基いて考察し、解釋する課題は併し經驗科學の對象ではない……」(W. I. S. 123) かくて彼は價值哲學の可能性といふことに關しては別に争ふところではないが、飽くまで經驗科學者として止まらんとし、年若き時代近代の論理主義者リツケルトを驚嘆せしめたといふ彼の歴史的知識の豊かさは文化科學の領域に於けるそれ自體完成した概念體系化、價值體系化に反對せしめざるを得なかつた。「測り知れざる事象の流れは永遠に向つて流動する。人間を動かす文化問題は不斷に新らしく染色されて形造られる。従つて常に無限の流れをなす個體のうちから我々に對して意味を保有するもの、即ち歴史的個體となるもの、かゝるものゝ範圍は常に流動的である。その下に於て個體が考察され、科學的に把握されるところの思考聯關は

轉變する。……故に文化科學がそれを取り扱ふことを天職とすべき諸問題諸領域の定義的客觀的妥當的體系化的固定の意味に於ける文化科學の體系はそれ自體無意味であらう」(W. I. S. 184) 已に繰り返して述べしが如く、われわれは實在の渾沌に科學的秩序をもたらさんがためには一定の立場に立つことを必要とする。實在を思惟的に克服せんがために營まれる概念の構成に當つてもまたこの立場が指導的地位を占める。然もこの立場たるや文化内容の或は除々なる或は急激なる轉變と共に動搖するものであつて、價値理念との關係づけの具體的態様は従つて人間文化の暗い將來へ動搖的に投げ込まれる。故に科學的視野が擴大され或は變化すると共に過ぎ去りし昔に形造られし思考から、くりは必然的に分解されて、新らしき立場に基く新らしき概念構成が常住に營まれねばならぬ。こゝに文化科學的仕事の進歩があり發展がある。この進歩發展の事實はわれわれがそれによつて實在を把握せんとする諸概念の改造過程に現はれる。即ち社會科學の領域に於ける廣大なる進歩は實質的には實際的な文化諸問題の推移と結びつき(方法的には)概念構成の批判の形をとる」(W. I. S. 208)。

以上述べしところによつて、我々は歴史的社會的現實態と文化諸科學一般との關

係を知り、特に自然科學的方法との嚴密なる限界づけによつて、文化科學一般の特性をウエーバーから聞くことができたのであるが、従來他の特殊文化諸科學が然りし如く、コント以來のあらゆる流派の社會學が社會的事象の何か「規則的なるもの」反復的なるもの「更に、謂はゞ普遍的なるもの」を求めて來たことは周知の事柄である。かゝる事實は上述の文化科學一般の意義と何等矛盾する所なく解し得るであらうか、或は文化科學への自然科學的方法の不當なる侵入として放逐さるべきものであらうか、かゝる問題を次章に於て問題として見たいと思ふ。

- 1) Simmel; Soziologie 1923 S. 2.
- 2) Weber; Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre (W. I.) S. 116.
- 3) Simmel; a. a. O. S. 3.
- 4) Dilthey; Gesammelte Schriften I. S. 27.
- 5) 本論文; S. 14 ff. 參照
- 6) Weber; Wirtschaftsgeschichte S. 3.
- 7) Rickert; System der Philosophie 1921 S. 230.

第二章 文化に於ける普遍的なるもの

西南學派に從つて經驗科學を歴史科學と自然科學とに大別する場合、われわれに

直ちに問題となる事は、生物學、胎生學、又翻つて經濟學、法律學、言語學等は何れの科學に編入さるべきであらうかといふことである。差し當つて、例を社會學にとるならば、これは社會現象をその文化意義に於て把握せんとする限り文化科學に屬するといふ事は、誰しも肯くところであらうが、然らば社會學は、リツケルトの主張する歴史科學の如く文化事象を個別化的方法を以てその一回起性(Einmaligkeit)に於て把へんとするものであらうか。勿論然らずと答へざるを得ない。從來社會學は例外なく、社會現象の規則性、法則性、反復性を求めて來たこと、即ちその意味で何か普遍的なるものを求めて來たことは否むことのできない事實である。それ故にリツケルトは本來的な歴史學でもない、それかと言つて自然科學にも屬しないところの一種の混合形式、中間領域として社會學、經濟學等を取り扱ひ、その意味でそれらは、歴史的科學に於ける自然科學的要素²⁾として配列されざるを得なかつた。

リツケルトは云ふ、普遍的な文化科學によつて我々の原理的區別はなるほど制限はされるが決して排棄されることはない。何となれば文化てふ概念はこゝでも對象の選擇を規定するばかりでなく、或る點では概念構成、或は對象の敘述を價值關係的にするからである。即ち文化科學に於ける概念の普遍性には限界が存在する。

この限界は即ち文化價值である。』即ち何れの場所に於ても、常に彼によつて主張されることは『中間領域はなるほど存在する。併しそれによつてわれわれの原理が排棄されることにはならない』といふことにある。然も彼に於ては中間領域は「文化科學に於ける自然科學的要素」である。それ故に言葉のもつ普遍的意義といふが如きものもリツケルトに於ては自然科學的概念構成に係るものとなる。われわれは行きつく所まで行つた彼の思想に反對せんとする限り、彼とは全然別個の立場に立たざるを得ないが、その論述は自ら本論文の範圍外にある。

さて、自らを顧みる時、われわれはリツケルトの所謂中間領域に立つてゐるものである。彼によつて極めて不充分にしか論せられなかつたわれわれ特殊科學的立場の積極的な學的根據づけをウエーバーは如何にして行はんとしたか。

リツケルトの個別化的普遍化的方法の二元論から出發する時、社會學は彼の云ふ「普遍化的文化科學」と呼ばれるであらう。こゝでは文化素材は普遍化的に取り扱われる。

併しかゝる規定によつては何等の問題解決も與へられるものでなく、むしろこゝで始めて文化特殊科學従つて社會學方法論に問題が提出されるのである。

文化に於ける普遍的なるものとは一體如何なるものか。文化素材を普遍的に取り扱ふとは一體如何なることを意味するか。これが明らかにされて始めて文化特殊科學の方法論従つて社會學的概念構成の問題も解決されるのである。

こゝに二つの事例を取つてみる。一、刺傷が一人の死をもたらず。二、自主といふことが協同精神を呼び醒す。

第一の事例に於ては、われわれはこれを自然科學的に忠實に刺傷と致死との因果聯關を説明し得る。この聯關は自然必然的、非解釋的、沒意味的因果聯關である。これに反して、第二の事例は同じく事象聯關とは雖も第一の事例とはその意味を異にする。自治と協同精神といふ二現象は自然必然的因果聯關を示すものではない。

これは即ち明證的解釋的意味聯關であり、ウエーバーの言葉を借りれば「客觀的可能性及び十全なる因果惹起性(adäquate Verursachung)」を持つ意味聯關である。リツケルトに於ては第二の例もやはり一つの單なる因果聯關である。蓋し彼に於ては歴史的記述は價值關係づけによるものであるといふことのみが強調されて、この價值關係づけによつて意義を得た「歴史的事象の作用聯關」そのものは單に因果聯關として片づけられてゐる。この歴史的事象の作用聯關そのものを問題にし、その性質論理

的意義を明らかにする試みとしてわれわれはウエーバーの、Objektive Möglichkeit u. adäquate Verursachung in der historischen Kausalbetrachtung¹⁾を擧げることが出来る。こゝにウエーバーはリツケルトより一步を進めたものと見られ得る。

第二の事例に於ては、何故「意味」の見地を離れ得ないか。こゝに二人の人間の間を生ずる例へば交換といふ出来事をとつてみる。この場合我々が全然「意味」の見地を離れてみるならばそこには、外的に知覺され得る経過、即ち筋肉運動の單なる叙述、またもしその際何か語られる場合には、経過の謂は、物理的なるものを形作る所の音調の單なる叙述のみが存在し、然もこの経過は如何なる方法によつても理解できないであらう。何となればこの本質は兩人が自分達の外的態度に附加するところの「意味」に於て存し、彼等の現在の態度のこの意味はその將來の態度の「規則」を現はしてゐるが故に、この意味なしには……苟しくも交換なるものは一般に、現實に可能でもないし、また概念的に構成されもしないのである」(W. I. S. 331-332)。

即ち文化に於ける普遍的なるものが語られる時には、常に自然に於ける普遍的なるものと違つて「意味聯關の普遍性」又は「意味形像の普遍性」が問題となつてゐるのである。

ウエーバーに倣つて「中世の都市經濟」なる概念を取つてみるに、これはリツケルトによれば「相對的歴史的概念」である。相對的歴史的概念は「唯一的實在的客體」に於てはなく、若干のその他では相互に異つてゐる個體に存在するところの諸特性の複合態に歴史的意義が附着してゐる所⁵⁾に存在するのである。

何故にかゝる概念は相對的歴史的概念と呼ばれるのであるか。例へばこゝに「獨逸人」なる概念をとつてみるに、それをフリードリツヒ大王、ビスマルク、ゲーテ等に比較して考へるならば普遍的であり、だが人類一般てふ概念に照らしてみるならば何か特殊なものである。われわれはかゝる相對的特殊的概念を「相對的歴史的概念」と呼ぶ。⁶⁾

人はフリードリツヒ大王、ゲーテ、ビスマルク等に「ハンブルグ、ブレーメンの經濟」人類一般といふ言葉に「歐羅巴の經濟」といふ言葉を置き換へてみるならば「獨逸人」といふ言葉に相當する「中世の都市經濟」なる概念がこの相對的歴史的概念なることを直ちに理解するであらう。リツケルトによれば文化意義は常に特殊的なるものに附着するのであるが特殊なるものと普遍的なるものとの概念は相對的である。

さて、中世の個々人、或はハンブルグ、ブレーメン等は多かれ少なかれ、共通にこの「中

世の都市經濟的〔なる性格をもつたものとして、即ちかゝる性格の類型的代表者として現はれてゐるのである。こゝに「中世の都市經濟」なる概念の普遍化的或は類型化的要素が見られる。

かくの如く普遍化された或は類型化された「中世の都市經濟」なる概念は自然科學的類概念と如何に異なるか。

リツケルトによれば(一)この概念はなほ價值關係的である。彼は云ふ相對的歴史的概念要素の統一その表徴の共屬性は絶對的歴史的概念内容の統一と同様に價值關係づけに基いてゐる。

(二)次に「中世の都市經濟」なる概念が當時の諸都市諸住民に對する關係は決して動物學に於てあらゆる猿は四肢類に屬し或は世界物體の種々の運動が引力法則の概念に屬するのと同様の意味に於てはならない。即ち類概念は自己の類例に對してあらゆる場合に同程度に共通なものを示すのであるが、相對的歴史的概念は之に反して意味形像の普遍性を示すものであり、この意味形像たるや、種々の諸都市、諸住民によつて種々の異なる強度に於て擔はれてゐるものである。この意味に於て意味聯

關の普遍性を示す相對的歴史的概念は自然科學的類概念から區別されるのである。

文化に於ける普遍的なるものは自然に於ける普遍的なるものより上述の如く區別されたが、是はまた同様に「絕對的歴史の個性的なるもの」からも區別されねばならない。「價値の唯一性に基く個性的なるもの」「唯一の價値の實現と見られる個性的なるもの」からも區別されねばならぬ。例へば唯一の人格、かゝるものには普遍化、類型化の施しやうがない。われわれがナポレオンについて語ることはビスマルクには妥當しない。妥當する場合には既にそれはナポレオンについて語つてゐるのでなく『ナポレオンの如き人』について語つてゐるのである。『ナポレオンの如き人』は或は甲に或は乙に妥當し得るであらう。われわれはドン・ファン型とかハムレット型とかについて語る場合には、ドン・ファン、ハムレットを何か普遍的なるもの、その意味に於て類型的なるものにまで引き下げねばならない。

かゝる絶對的個性的なるものから最高の普遍性を持つものに至るまで、その間無數の段階の存在が可能である。中世の都市經濟なる概念はその無數段階の單なる一例にすぎない。

註 われわれは次に述べる理念型についてもかゝる意味で無数の段階が存することを認めねばならぬ。この事實を無視することが理念型を無意味に分類せんとする徒勞を行はせるのである。

かゝる文化に於ける絶對的個性的なるもの、及び普遍的なるものの本質を把捉せんがためにその手段として必然的に用ひられねばならないものとしてマックス・ウエーバーによつて主張されたのが即ち彼の理念型である。

- 1) Rickert: Kulturwiss. u. Naturwiss. 1926 4. Kapitel, Mittelgeschichte.
- 2) ” : Die Grenzen..... S. 330 ff.
- 3) ” : Kulturwiss u. Naturwiss. 1926 S. 109.
- 4) ” : Die Grenzen..... S. 296.
- 5) ” : a. a. O. S. 334.
- 6) ” : Kulturwiss. u. Naturwiss. S. 106.

第三章 理念型論

人は理念型とは何かと質ねるより理念型的觀方とは如何なるものかと質ねる方がより妥當な問題の提出の仕方であらう。何となればウエーバーによれば理念型は文化認識の目的としてではなく、手段として考察に入り來るものであるが故に。即ち理念型は文化認識に當つてその客觀性を保證する手段であり、而してそれのみ

に止まる。

扱てウェーバーによれば、凡そ歴史的社會的科學は何等かの程度に於て個別的個性的事象の意味聯關の把握即ち一個性的事象の他の同様に個性的事象への因果歸屬を求めらるものである。「一現象の個性が問題となつてゐる所では、因果問題は法則を求めらる問題ではなくして具體的因果聯關を求めらる問題である。即ちその現象が類例として如何なる「法式」に屬せしめらるべきかといふ問題でなくて、現象が結果として如何なる個性的狀態に歸屬せしめらるべきであるかといふ問題であり、それは歸屬の問題である」(W. I. S. 178)即ちこゝでは因果惹起の法則は目的としてゝはなく、個別的現象の具體的因果歸屬の手段として考察に入り來るものである。それ故にその法則が普遍的に抽象的になればなる程それは具體的個性的現象の因果歸屬に資する所は少なくなると云はねばならぬ。然しこの事は文化科學的認識に於て、法則的なるもの、普遍的なるものが何等科學的正當性を持たぬといふことを意味するのではない、否、かゝる知識ウェーバーの云ふ「法則定立的知識」nomologisches Wissenによるにあらざれば具體的因果歸屬は客觀的妥當性を持ち得ないと云はねばならぬ。だがこの場合の法則的知識は決して狹義の自然科學的法則を意味しない、それはウ

エーバーの云ふ「客觀的可能性判斷」十全なる因果惹起性」の二範疇に關する知識である。

次に理念型論に入る前段階としてこの「客觀的可能性」十全なる因果惹起性」の問題を考察して見る。

現實に個別的事象又は過程の成立を制約してゐる原因的要素は實に無限であり、當該具體的結果を招來せしめるに當つては個々の無限なる原因的契機は一切不可缺である。それにも拘らず、結果としてのこの個別的事象の、原因として他の個別的事象への因果歸屬を如何にして科學的に問題にし得るであらうか。こゝに於ても從來述べ來つた立場又は關心なるものが重大な意義を持つて來る。歴史的敘述に際しては、一定の歴史的事象なるものは常に概念的に構成せられたものであり、或る立場の下に於て秩序づけられたものである。實在の無限なる多様性はそのまゝ模寫されるものでなく、そこではリツケルトの云ふ、或る程度の簡單化 Vereinfachung が行はれるのである。かくて上述の問題は次の如く解釋されねばならぬ。結果として一個別的事象のわれわれの立場又は關心に従つて本質的な部分、重要な側面が

選び出され、然もこの本質的部分を成就せしめたる無限の決定要素中のどれに、これが歸屬せしめらるべきかと。この無限なる決定要素中の一定の原因的要素たるこのど、れが結局に於て求められるのであつて、無限なる決定要素への完き盡せる因果背進は實際に不可能であるばかりでなく、方法的に無意味であらう。

以上は謂はゞ史的因果關係の認識論的問題であるが、ウエーバーに於ては、それよりも、かゝる史的因果關係が方法的に妥當な仕方^に於て如何にして把握されるかといふことが重大な問題であり、それを究めんとした所に、われわれが已に指摘したやうにウエーバーのリツケルトよりの一步の進出がある。かくてウエーバーは云ふ。「我々の本來的問題は如何なる論理的機能によつて、結果のかの本質的部分と無限なる決定契機の内のかの一定の要素との間にかゝる因果關係が存在するといふことを洞察し、且つこの洞察を論證的に基礎づけることができるかといふ點にある」(W. I. S. 273.)

その論理的機能としては、經過の實際的因果的組み合せの一つ或は二つを變更し、或は排除して、かく變更された條件の下に於て本質的な點で同じ結果が期待されるか或は又何か違つた結果が期待されるかどうか質してみるよりほか仕方、方法はな

い。ウエーバーも云へるが如く「現實の因果聯關を洞察せんがためには我々は先づ非現實的因果聯關を構成せねばならぬ」(W. I. S. 287.) 若し同じ結果が期待される場合にはその變更された條件、即ち原因はこの結果に對して本質的な點に於て因果の關係を持たぬことを示し、反對に何か違つた結果が期待される場合には逆である。かゝる判斷をウエーバーは「可能性判斷」[Möglichkeitssurteil]と呼ぶ。「可能性判斷」とは或る條件の變更又は排除に際して生ずるであらうところのものに關しての立言である。

(W. I. S. 275.) 或は「現實に實存せし實在の諸要素の一つ或は若干を度外視することによつて、又は一つ或は二三の條件の點で變更された過程の思惟的構成によつて、想像の像を造ることを意味する。」(W. I. S. 275.) かくの如き可能性判斷に照らして當該原因が結果の本質的な部分に關して因果の關係を有してゐる時、ウエーバーはこれを「十全なる因果惹起性」に於て立つてゐるといふ。

かゝる觀方が後述の理念型的觀方であり、かゝる「想像の像」が畢竟理念型に外ならないのである。何となれば一定の條件の變更、排除といふことはその際排除せられざる條件、要素の「思惟的高昇」[geistliche Steigerung]に他ならないからである。それ故に理念型は事象の意味聯關に就いての法則定立的知識による可能性判斷内容を常

にそれ自身に含んでゐると言はねばならぬ。これが又後述の理念型の持つ生成的性格 *genetischer Charakter* を意味するのである。故にウエーバーの文化科學方法論の全體系から考へれば理念型はかゝる歴史的因果歸屬の手段たる位置にある。

然らばかゝる可能性判断には如何にして達し得られるか、こゝでは分離 *Isolation* と普遍化 *Generalisation* とが問題となる。即ち我々は所與の要素の各々が經驗規則にはめ込まれ得るまで従つて條件として他の要素が存在する場合に、經驗規則に従つて、要素の各々から如何なる結果が期待されるであらうかといふことが確立されるまで所與を要素に分析するのである。(W. I. S. 275-276.)

かくの如き分離(要素にまで分析)と普遍化(經驗規則にはめ込む)によつて可能性判断に達し得るのであるが、かゝる意味で可能性判断はその成立に當つて常に經驗規則との關係を持つてゐるものである。然らば經驗規則とは如何なるものを意味するか、これはまたウエーバーによつて經驗の規則 *Erfahrungsgesetze*、*事件の規則* *Regeln des Geschehens*、*法則定立的知識* *nomologisches Wissen* 等の言葉によつても現はされてゐる。即ちそれらは與へられた狀況に對して人間が常に反應するところの様態に關しての知識、即ち一定の承認せられた經驗規則の知識である。(W. I. S. 226.) 而して經驗規

則、法則定立的知識は可能性判断を施すに當つて指南となり、基準となるものであり、従つて理念型構成に當つても、これは重要な意義を有してゐる。この事實を輕視する場合に、理念型は直観によつて一舉にして生ずるといふ説が現はれる。

かくてわれわれは本論の中心問題たる理念型論に進む。已にわれわれは理念型を構成するとは畢竟可能性判断を施して想像の像を作ることにはかならないといふことを述べた。かるが故に理念型はその構成に於て常に事象の意味聯關の合理的解釋に係る可能性判断内容をそれ自身に持つてゐる。これが理念型概念の持つ生成的性格である。

元來理念型といふ言葉はウエーバーは [Johann: Allgemeine Staatslehre から借りて來たものであると言はれてゐる。然しながらイェリネックに於ては理念型なる語は規範的認識様式 normative Erkenntnisart より來る「あるべきもの」Sollendes を示すものであり、それはウエーバーの言ふ模範類型 vorbildliche Typen (W. I. S. 199.) を示すものであつて、ウエーバーの意味する理念型とは全然異なるものであることは明らかである。

ウエーバーの意味する理念型とは如何なるものであるか。其は如何にして構成されるか。構成された理念型は如何なる性質を有するか、及びその性質に従つて手段として如何なる機能を發揮するか。以下これらの問題について述べやうと思ふ。

こゝに中世の都市經濟なる概念をとつて見るならば「都市經濟なる概念は總括的に考察せられたる都市の裡に實際に存在せる經濟原理の「平均」としてははなく、正に理念型として形作られるのである。理念型は一つ、或は二、三の立場の一面的高昇によつて、その立場に關係する所の散在せる、こゝには多く、かしこには少なく、時には全然存在せざる個別的現象をそれ自體一つの統一せる思惟形像にまで、まとめあげることによつて得られるものである。」(W. I. S. 191.) 「各時代、各土地の營業に於て散在して發見される一定の特徴 (Züge) をその整合に於て高昇し、それ自體矛盾なき理念像 *Ideebild* にまでまとめあげるものである。」(W. I. S. 191.)

何故に平均としてはないか、平均なる概念には單に數量的關係が現はされるに過ぎず、後述の生成的性格はそこでは見失はれてしまふからである。

こゝに於てもわれわれはウエーバーの思想を一貫せる立場なる考へを見る。理念型構成に於てもこの立場なるものは不可缺な前提をなすものであつて、この立場に立つことによつて本質的なるものを選び出し、かくして抽出された諸特徴を可能性判斷の場合に述べしが如く法則定立的知識に照らしつゝ高昇してそれ自體矛盾なき理念像にまで結合することができるのである。こゝに問題とすべきは理念型

は一定の立場が與へられるならば要素を高昇することなく一擧にして直觀的に直ちに構成さるべきであるといふ説である。1)これは或る意味でウエーバー理念型構成に對する正當な批評である。何となればウエーバーに於ては高昇せしめられた意味要素はそれ自體矛盾なき理念像にまで如何にして結合されるかといふこと即ちかゝる要素に統一を與へるものは何かといふことは説かれてないからである。だからと云つて上述の説は直觀の名によつて、理念型構成に當つての法則定立的知識の重要性を輕視する見解のやうに見うけられる。少なくともウエーバーの云ふ理念型の構成は法則定立的知識に照らして要素から如何なる結果が期待できるかとこれを高昇して見なければならぬ。然らざる限り理念型が意味聯關の客觀的可能性を持つといふことが無意味になるし、同時にそれは生成的性格を見失ふことになるのではあるまいか。

こゝに於て問題になることは、かくして選り出されて高昇せしめられた諸特徴は如何にして「それ自體矛盾なき理念像」それ自身統一せる思惟形像にまでまとめあげられることができるのであるか、といふ事である。ウエーバーはこの點を明らかに説いてはゐない。然しながらわれわれはこの諸特徴をまとめあげるに當つて、これ

に統一を與へ、矛盾なき理念像たらしめる背後の何物かを考へねばならぬ。それなくしてはこの「まとめあげ」Zusammenschleissenは不可能であるが故に。

この何物かをわれわれはやはりウエーバーの言葉をとつて例へば中世都市經濟、或は資本主義文化等の「理念」Ideeであると思ふ。

概念形成に當つて普通の論理學の教へる所は、異中の同を取り、抽象によつて諸表徴の普遍性を得た後、更にこれを統一態にまでまとめあげて得られた觀念が即ち概念である。然しながら例へばわれわれは人間なる概念を構成するに當つて多くの人間の異中の同をとり、これを統一態にまでまとめあげることによつて人間といふ概念を作るのではない。一人の人間を見た時、已にわれわれは人間の概念ができてゐるのである。然らざれば最初に見た人間以外のものはこれを人間と見ないといふことになる。經驗と共に起り來るも、經驗より來るものに非ずてふカントの先天的形式の考へ方をこの場合必然的に考へねばならない。これと同様の考へ方が理念型構成に當つて當然許されねばならない。諸特徴を高昇してこれに統一を與へて理念像となす謂は、理念型の理念ともいふべきものを考へねばならない。我々はこの統一を與へる或る物をウエーバーの言葉に従つてIdeeと呼ぶ。彼は言ふ。

「各時代各地に於て散在して存在せる一定の特徴を整合に於て一面的に高昇し、それ自身矛盾なき理念像にまで作りあげ、その中に現はれてゐる思想表現に特徴を關係せしめることによつて Utopie に於ける手工業のイデーを示すことができる。」(W. I. S. 191)「理念型は個々の散在せる近代的な、物質的精神的文化生活の諸特徴をその特性に於て高昇し、われわれの考察にとつて矛盾なき理念像にまで結合する。これは資本主義的文化のイデーの指示の試みであらう。」(W. I. S. 192)かくてわれわれはかく主張する。かゝる高昇された諸特徴に統一を與へるものはこのイデーである。而してかくして統一にまでもたらされた理念型は即ち又このイデーを指示してゐるものである。これは明らかに一つの循環であり、然も避け難き循環である。

かくの如き理念型はわれわれの想像に對しては充分に動機づけられた従つて客觀的可能的として、われわれの法則定立的知識に對しては十全なるものとして現はれるところの意味聯關の構成を現はしてゐるものである。

かくして作られた理念型は如何なる性質を有するのであるか。「理念型はこの機能——現實在との比較標準としての機能——に於ては特に歴史的個體を或はその

個々の要素を生成的概念に於て把握せんとする試みである。(W. I. S. 191.)「數個の現象に共通に存在する諸表徴の複合態といふ意味に於ける單なる類概念は例へば概念要素の意義を度外視し單に日常の用語を分析する場合の交換の概念の如きものである。この概念を何か限界効用法則に關係せしめ、經濟的に合理的な過程としての「經濟的交換」の概念を構成するならば、あらゆる論理的に發展せしめられた概念と同様にこの概念も交換の『類型的』制約に關する判斷を含有してゐる。然もそれは生成的性格を取り従つて同時に論理的意味に於て理念型的となる……」(W. I. S. 202.)

歴史的對象を文化意義との關係に於て見る、即ちその成果と將來への發展の歴史的意味聯關の中に配列して觀る即ち妥當なる因果歸屬の様式のうちに觀る、ひいては事象の歴史的意義を把握することが、換言すれば歴史的對象をその生成的性格に於て見ることであり、それは決して出來事の單なる類的なるものを把握するのでなく、類型的制約に關する判斷をそれ自身に含んでゐるとは云へ、尙生成的性格を有するものであり、その意味に於て、むしろ性格的なるものを把握せんとする試みである。かくすることによつてのみ歴史的現象の文化科學的理解認識は始めて妥當な意義を持ち、論理的可能性と客觀性とを得ることができるのである。理念型は已述の如

くその構成に當つてこの生成的性格を持つもので、こゝに自然科学的類概念との明確なる區別を見、かゝる性格を有してゐるが故に歴史的事象の因果歸屬に役立ち得るのである。「理念的的概念構成の目的は類的なるものをでなく、反對に文化現象の特性を意識にもたらすことにある。」(W. I. S. 202.)

次に理念型は實在との比較標準として構成されしものにして、それ自身非現實的²⁰³なるものであり、純粹なる思惟形像¹⁹⁷であり、我々の「想像の所産」¹⁹²であり、一つ或は二三の立場の一面的抽出により、¹⁹¹實在要素の思惟的高昇¹⁹⁰によつて得られたる Utopie である。

数字は凡て Wissenschaftslehre. の頁を示す。

以上の如き謂はゞ消極的性質により次の如き積極的特性を持つ。「高昇された一義性」⁵²¹「概念的鋭さと純粹性」¹⁹⁴「明證性、內的に矛盾なきこと」¹⁹⁰「論理的完全性」²⁰⁰。

次に理念型は手段として如何なる機能、用途を持つかといふ問題を考察して見る。

理念型は實在者の叙述ではなく、經驗的認識の目的點でなくて手段として役に

立つものである。然らばその手段としての機能は如何なるものか。

理念型は歴史的因果關係の「意味解釋の圖式」(Deutungsschemata)として役立つ。而してこの圖式の純粹に個別的性格を持つものは假設hypotheseと呼ばれ、一般的性格を持つものは理念型と呼ばれる。(W. I. S. 130-131.)ヒポテーゼとしての理念型は勿論自然科學的ヒポテーゼとはその性質を異にする。何となれば其處に於てはヒポテーゼは徵驗verifikationによつて始めて理論的意義を有するものであるが、理念的ヒポテーゼはかゝる徵驗を必要としない。それは實在を測定する一つの標準としての役割をなすものであつて、それ自體實在に適合する必要はないからである。

史的対象の因果歸屬に當つて最も基本的なる「意味解釋の圖式」としての理念型は、「目的手段の範疇」[Kategorie Zweck u. Mittel (W. I. S. 126.)]としてのそれである。ウェーバーによれば「合理的解釋は與へられた意圖Xに際しては、已知の對象の規則に従へば y, y' の内の一つの手段、例へば y を選擇せねばならぬ」といふ條件的必然判斷 dingte Notwendigkeitsurteil の形をとり得る。(W. I. S. 129.)かゝる必然判斷の形を示し得るが故に、又法則性といふ意味に於ける普遍的因果考察によつて達し得らるゝものなるが故に、かくの如き行動の解釋は明證性を持つ事ができる。(W. I. S. 127.)かゝ

る必然判断に従ふ行動をウエーバーは目的合理的行動 *zweckrationales Sichverhalten* と名づけ、この行動の解釋理解は常に明證性を持つものである。「われわれが人間の行動を手段が明確に認識されてゐて、且つ明確に意識され、意欲された目的によつて制約されたものとして理解する所では、この理解は疑ひもなく特に高度の明證性を得るものである。」(W. I. S. 127.) 主觀的に把握された目的にとつて主觀的に十全なるものとして考へられた手段によつて方向づけられる行動は目的合理的行動であり、かゝる行動の目的合理的解釋は最高度の明證性を持ち得るものである。(W. I. S. 404.)

われわれはかくの如き「合理的解釋の明證性」を示す「理念型的意味解釋の圖式」と現實の具體的行動とを比較して、兩者が一致してゐるか、また如何なる程度にこの具體的行動は圖式から隔つてゐるかを檢することによつて史的現象の意味聯關の解釋、因果歸屬を可能ならしめることができる。圖式と現實の行動とが完全に一致すると承認される場合には——勿論それは實際にはあり得ないことではあるが——この圖式従つてヒポテーゼはそのまゝ直ちに具體的個別的事象の因果關係を表示することになるであらう。この場合、理念型的意味解釋の圖式は最も個別的具體的性

格を持つものから——例へば一八六六年の戦に於けるモルトケの行動の理念型——最も普遍的抽象的性格を持つもの——例へばグレンシャムの法則、後述の社會學的規則——に至るまでその間無數の段階が存在し得る。然しながら如何に普遍的な性格を有する理念型と雖も何等かの程度に於て、かの「生成的性格」を所有して居らねばならぬ。然らざればそれは自然法則、類概念と化してしまふから。

次に理念型のもつ發見的價值 *heuristischer Wert* の問題に移るが、これは元來前述の「意味解釋の圖式」としての理念型の機能に隨伴するものである。理念型に實在が比較されて何等かの程度に於て「隔り」が見出される場合、ウエーバーはこれを理念型のもつ發見的價值と呼んでゐる。「理念型は單に現實在がそれに基づいて比較され、測定される概念的手段として使用される場合には探究にとつては高度の發見的價值、叙述にとつては高度の組織化的價值を有する。この機能に於ては理念型は不可缺のものである。」(W. I. S. 198-199.)特にウエーバーが「發展の理念型」[*Idealtypus der Entwicklung*]と呼んでゐるものは著しき發見的價值を有するものである。例へば手工業的經濟形式から資本主義的それへの發展は一つの理念型として構成することができる。

嚴密なる手工業的經濟組織に於ては資本蓄積の唯一の源泉は地代である。然るに制限された土地増加する人口等の要素から必然的に資本主義的經濟組織への發展を理念的に構成して見る時、現實の資本主義的經濟組織がこれに一致しないことを示す場合には中世の經濟形式は嚴密には手工業的でなく、他の要素が混入してゐたものであるといふことを發見することができる。かくてわれわれは中世の經濟組織の手工業的ならざる要素の歴史的意義を鋭く把握することができるのである。これ即ち理念型の持つ生成的性格によるものであつて、こゝでもまた理念型は自己の非現實性を宣言することによつて、その獨特の任務を遂行する。故にこの理念型的發展の構成は現實の歴史とは勿論混合されてはならないのである。

理念型は歴史的敘述に一義的表現手段¹⁹⁰ 鋭き概念を與へ得るものである。これは理念型の修辭學的機能⁵²²と云はれ、それは同時に分類的⁵²² 組織化的²⁰⁴ 機能²⁰¹を有する。これらの諸機能は理念型の持つ高昇された一義性、概念的鋭さ、純粹性及びその生成的性格の然らしむるところである。

歴史家は具體的聯關の單なる承認を越えて、どんなに簡單な個別的過程であらう

とも、その文化意義を確立せんとし、それを性格づけんとする試みを企てるならば、たゞ理念型的に鋭く一義的に規定される諸概念を以てのみ營むことができるのである。かくの如き企てに於て形式論理學の圖式 (*Genus proximum und differentia specifica*) を以て營まんとすることは無意味と言はねばならない。歴史的事象をその文化意義に於て、更にはその客觀的意味聯關の配列に於て、即ちその生成的性格に於て把握せんとする場合、單なる「上位概念種差」の圖式による事は、不可能であるばかりでなく、それ自體無意味である。これ即ち理念型の缺ぐべからざる所以である。理念型は自身に生成的性格を有し、客觀的可能性の範疇の使用の下に於て構成され、實在によつて方向づけられ、訓練されたわれわれの想像によつてその意味聯關は十全なるものとして規定されたものである。かゝる謂はゞ思惟的構成態たる模型としての理念型は個別的事象を一般的類例的綱目に分類、包攝するのでなく、一定の客觀的可能性を持つ意味聯關の裡に配列し、その位づけを行ふことによつて史的事象の因果關係を直觀化し、以て因果歸屬を十全に行はしめるものである。

ウエーバーに於ては社會的規則、法則の認識はそれ自體價值あるものではない。

社會的法則の認識は社會的現實態そのものゝ認識でなく、われわれの思惟が社會的實在を認識するために使用する種々なる手段の一つに過ぎない。何となれば生活の具體的個性的に性格づけられた個別的實在が一定の個々の關係に於てわれわれにとつて意義意味を有するに非ずしては如何なる文化諸過程の認識も考へられない。彼に於ては凡そ歴史的社會的科學は一個別的事象の他の同様に個性的なる事象への因果歸屬を求めものである。然るに社會學は社會的事象の何か規則的なもの、類型的なるものを求めんとする。然らば社會學は歴史學に對して如何なる位置に立つか。「社會學は——已に屢、自明的として前提されてゐる如く——類型概念を構成し、事象の一般規則を求めものにして個別的な、文化的に重要な行動、構成態、人格の因果分析、因果歸屬を求め歴史に對立する。」「社會學は類型概念を構成し、事象の一般規則を求め……だが社會學はその概念及び規則を特に文化的に重要な現象の歴史的因果歸屬に貢獻することができるか否かといふ見地の下に、概念を構成し、規則を求め」(W. J. S. 520)に於ては社會學は歴史學の前仕事となつてゐる。それ故にウェーバー社會學は *Soziologie als Methode* であつて歴史の補助科學であると主張するものもあるがそれは充分正當であらう。2)

此の如き歴史と社會學の區別は歴史的社會的現實態の本質を把握せんとする態度としては、出發點に於て已に誤りを犯してゐるものであつて、ウエーバーがあれ程力を極めて斥けんとした自然主義的思想が彼自身の考へ方の中にも尙ひそんでゐるのを見落すことはできないと思ふが、この點に關する批評は別の機會に譲る。

こゝでは歴史學に對してかくの如く位づけられたウエーバー社會學に於ける理念型を主に彼の *Methodische Grundlagen der Soziologie* 及び *Wirtschaft u. Gesellschaft* に従つて辿つて見やうと思ふ。

已に述べし如く社會學は事象の類型概念、一般規則を求めんとする。然らばこの事象とは何か、換言すればウエーバー社會學の對象となるものは何か、彼は自己の社會學を定義的に規定して云ふ即ち「社會的行動を解釋的に理解し、かくすることによつてその行動の経過作用に於て行動を因果的に説明せんとする科學である。」³⁾ 即ち彼の社會學の對象は「社會的行動」である。然らば彼に於て「社會的行動」とは如何なるものを意味するか、抑、行動とは「一人の行動者或は複数の行動者が主觀的意味を動作と結合する限りに於ける人間的動作 *menschliches Verhalten*」を云ふ。⁴⁾

ウエーバーは態度(動作) *Verhalten* を行動 *Handeln* より廣義に解してゐるのは事實であるが、實際の叙述に於ては往々混用し

294° (W. I. S. 83)

行動は主觀的に抱かれた意味と結合する人間の動作であるがそれが社會的と呼ばれるのは如何なる意味に於てあるか。「社會的行動とは一人或は複數の行動者によつて主觀的に思はれた意味に従つて他の行動に關係し、かくすることによつて行動の經過上方向づけられる行動を云ふ。」

ウェーバー社會學の本來的對象は上述の如き「社會的行動」であつて、かゝる「社會的行動は過去の又現在の或は又將來に期待されたる他人の態度によつて方向づけられ得るものである。即ち過去の攻撃に對する復讐、現在の攻撃の防禦、將來の攻撃に對する防策の如く」⁵⁾

註 ウェーバーは社會的行動を *Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie* V. *Vergesellschaftung u. Gesellschaftshandeln* に於て種々に分析してゐるが、こゝでは社會的行動は「應右の如く定義されておけばそれで充分である。」

凡そ「人間の態度は外的であれ内的であれ、他のあらゆる事象の如く經過の聯關並びに規則性を持つてゐる。だが少なくとも完き意味に於て人間の態度にのみ固有であるものはこの聯關並びに規則性の經過が理解的に解釋され得るといふことである」(W. I. S. 103-104) かく人間の行動は解釋できる (*deutbar*) といふ點で單なる自然

過程とは原理的に異なるものであり、解釋され得るといふ性質は解釋され得ない自然過程に比して可測性 *Berechenbarkeit* のプラスを與へる、その意味で人間行動は單なる自然過程より以上である。人間に意志の自由が存すること、即ち行動の自由性と歴史的事象の持つ非合理性とは一方の増加が他方の増加を意味するといふ相互制約的關係にあるものでなく、正にその逆である。人間に行動の自由があればこそ、それは自然必然的過程と異つて、合理的、解釋的となり従つて可測的となるのである。

かくの如く人間の行動は解釋され得る聯關、規則性を持つものであるが、かゝる規則は如何にして科學的に把握できるであらうか、それはウエーバーの云ふ理念型的構成によつてゐる。こゝでわれわれはウエーバー社會學に於ける理念型の考察に移る。

この問題を考察するに當つて資するものは彼の社會的關係 *soziale Beziehung* の概念である。「意味に従つて相互に取られたる又意味によつて方向づけられたる若干人の態度が社會的關係である。」⁶⁾「而してかゝる社會的關係は全然意味的に認められたる仕方に於て社會的行動が爲される可能性 *Chance* に於て成立する。」⁷⁾「社會的關係の存續はこの可能性の存在のみを意味する。このことは誤解を避けるために常に

把持されてをらねばならぬ。」⁸⁾従つてウェーバーに於ては、友情關係或は一國家が存續し、又存續したといふことはたゞわれわれ(考察者)が一定の人々の一定の性質づけられた態度に基いて、平均的に抱かれた意味に従つて認められる仕方に於て、行動されるといふ可能性が存在し、又存在したと判斷することを意味する、而してそれのみに止る。⁹⁾

こゝにわれわれはウェーバーの原子論的考へ方を見る。

この可能性は意味適應的行動が起るといふ多少の程度の蓋然性として定義されてゐるが、¹⁰⁾かゝる可能性が類型的なものである時、ウェーバーはこれを社會學的規則と呼ぶ。「理解社會學の法則(規則)は或る一定の事情の存在に際して期待せらるべき社會的行動の認められた類型的可能性である。」(W. I. S. 519.)

然らば類型的可能性とは如何なる事を意味するのであるか。ウェーバーは社會的行動の經過の仕方を、意味的十全 *sinnhaft adäquat* と因果的十全 *kausal adäquat* とに分析してゐる。「動作の要素の關係がわれわれによつて平均的思考習慣 (*Denk-ewohnheit*) 感情習性 (*Gefühls-ewohnheit*) に従つて類型的——普通は「正しき」*richtig* と云ふ——意味聯關として肯定される程度に於いて聯關的に經過する動作は意味的十全と呼べる

べきである。』それに對して、諸過程の繼起が常に同様の仕方にて事實的に經過するといふ可能性が經驗規則に従つて存在する程度に於てこの過程の繼起は因果的十全と呼ぶべきである。』(W. I. S. 511) 従つてこの過程の繼起は常に反復性、近似性、平均性を以て認められる可能性を持つてゐる。社會的行動が何等かの程度に於て意味的十全に同時に又何等かの程度に於て因果的十全に現はれる可能性を有する時、この行動は類型的可能性をもつものだと云はれ、社會的行動のもつかゝる類型的可能性が行動の「社會學的規則」である。若しも意味的十全性を持たないならば數量的に蓋然性を以て與へられる行動の規則性も單なる統計的蓋然性を持つにすぎず、又如何に明證的意味的十全性を持つ行動も、それが何か反復性、近似性を以て實際に經過し得る可能性を持たない限り、従つて因果的十全性を持たない限り類型的可能性を持つものとは云はれない。従つて社會學的規則とは云はれない。即ち「社會的行動の理解的なる、思はれた意味に適應する——意味的十全——」ところの統計的規則性——因果的十全——のみが理解的行動類型であり、従つて社會學的規則である。』(W. I. S. 512) 而して最後にかくの如き意味的社會學的規則が即ち社會學的理念型である。故に社會學的理念型は類型的可能性を現はしてゐるものであり、比喻を以

て現はすならば、社會的行動の可能性の粹を示してゐるものである。

社會學に於てもまた理念型は手段として、現實的行動の比較標準として考察に入り來るものである。「類型構成的科學——例へば社會學——の考察にとつては行動に影響を與へるところの、非合理的な感情的に制約された行動の意味聯關は、構成された純粹なる行動の目的合理的經過(理念型)よりの隔りとして究明され、叙述される。」(W. I. S. 505.)

上述の如くウェーバーによれば社會學的理念型は類型的の可能性を現はすものなるが故に、而も社會學の課題は所詮此の如き理念型を構成することにあると斷じ得らるゝが故に、社會學はウェーバーに従へば一つの可能性の科學 (Möglichkeitswissenschaft) であると結論しても差支へはないと思ふ。かくて社會學的理念型は事實性 (Tatsächlichkeit) を現はす歴史的概念とも異り、必然性を現はす自然科學的概念とも異なる。歴史は實在性に關するが、社會學的概念は非實在性を宣言する。自然法則は無例外的に妥當 (ausnahmslos) せねばならぬが、社會學規則は *ideal* に妥當するものである。Ideal (typus) といふ語はこの意味で現實に適合する必要はないといふことを現はし、意味聯關の客觀的可能性を示してゐるものである。それ故に例へば實際に

は良貨を以て支拂ふ人があつたとするも、グレシヤムの法則は何等その妥當性をそこなはれることはないのである。

次に理念型を分類することについて一言を費してみたいと思ふ。

元來ウエーバーは一九一三年即ち“Ueber einige Kategorien der vorstehenden Soziologie”の論文以前にはSoziologieといふ言葉はむしろ嫌惡的に使つてゐる。彼の歴史理論より社會學への轉向は“R. Stammers Ueberwindung der materialistischen Geschichtsauffassung.” 1907. に於て現はれ始め“Methodische Grundlagen der Soziologie”に於ては明らかに歴史學に對立させて社會學固有の任務を論述してゐるのは事實である。かくの如き歴史理論より社會學への轉向に従つて理念型そのものゝ區別を考へねばならぬいのであるまいか。區別が存すると主張する學者は多い。即ち歴史理論に於ける理念型と社會學に於ける理念型を區別せんとする試みとしては次の如き諸學者の説を擧げ得る。

Andreas Walther; Max Weber als Soziologe, Jahrbuch für Soziologie II. Bd. S. 11 ff.

Bornhard Pfister; Die Entwicklung zum Idealtypus 1928, S. 170—172.

高田保馬博士；社會關係の研究 105—108頁

然しながら、われわれはさきに、歴史的社會的現實態を把握せんとする態度として、しかく單純に歴史と社會學とを分離することに反對しておいたが、上記諸學者の理念型を區別せんとする動機はこの歴史と社會學の分離の考へ方に由來するものなるが故に、その考へ方そのものにわれわれは反對せざるを得ないのであるが、それはまた同時にウエーバー自身の批判になるのでこゝでは保留することにせねばならぬ。併しわれわれはウエーバー自身に忠實に従ふ場合にも尙上記諸學者の説を不當然らざれば無益と論斷する根據があると思ふ。

已に理念型の意味解釋の圖式としての役割を論ずるに當つて、かゝる圖式は個別的具體的性格を持つものから、最も普遍的抽象的形式に至るまでその間無數の段階の存在の可能なることを述べた。即ち一八八六年の戦争に於けるモルトケの行動の理念型或はハンブルグの都市經濟の理念型、或は中世の都市經濟の理念型、啓蒙時代の理念型、又協約國家、更には *Gemeinschaftshandeln* の理念型等々、無數の段階が考へられる。だから強ひて理念型を分類せんとする場合、ウエーバーに嚴密に従ふならばその分類は次の如くであらねばならないであらう。

一、ヒポテーゼとしての理念型。二、狹義の理念型。

一は前例のモルトケの行動の理念型の如きものにして、これはその *Einmal* を第二章に於て論述した絶對的個性的歴史的概念に持つものである。二は同じく第二章に於て論じた相對的歴史的概念に相應するものであつて、相對的歴史的概念に無數の段階が存在したやうに、之に相應する理念型にも亦無數の段階が存在し得るのである。

前記諸學者の説はこの一、と二、とを混同せしめ、且つ二、狹義の理念型を更に歴史的理念型と社會學的理念型とに分類せんと企てるものであるがその分類たるや只一應のものに過ぎないと思はれる。何となればかゝる個別的形式から普遍的形式に至るまで無數の段階の可能なる理念型もその構成に當つての考へ方は毫も變るところはないからである。それらは凡て、依然として或る一定の要素が高昇されて、それ自體矛盾なき統一せる思惟形像にまで結合されたものであつて、その構成に於て事象の意味聯關の合理的解釋に資する生成的性格を等しく所有してゐるものである。従つて歴史的或は社會學的理念型といふも、それはその構成理論の側からは決して區別されるものでよない。而して理念型論に於て最も重要なる點はこの構成

理論の側面にある。理念型が文化認識に當つて目的としてゝなく、手段として考察に入り來るものであるといふのも、それは畢竟するにこの構成理論の然らしめるところであつて、強ひて前記諸學者の如く分類するならばそれは所詮概念の廣狹の區別に歸せられるであらう。蓋し理念型の内容とも云はるべきものはウエーバーの方法論よりすれば常に歴史的意味形像であらねばならない。歴史的とはこの場合超越的歴史哲學的、或は價值哲學的といふ言葉から區別された意味での歴史である。彼に於ては常に *Wie der Geschichte* が問題であつて *Was der Geschichte* は問題とはならない。故に社會學の取り扱ふ對象、即ち社會學的理念型の内容ともなるべきものはそれが如何に内容上貧弱で時間空間上如何に普遍的に廣く行き渡つてゐやうとも依然として歴史的意味形像であらねばならない。ウエーバーは明確に理念型構成に當つては「特徴を實在から借りて來る」(W. I. S. 192.)と云つてゐる。だから例へば國家の理念型の内容もやはり中世の都市經濟の理念型の内容の如く歴史的經驗的意味形像であらねばならない。而して國家の理念型が個々の具體的國家に對する關係は、中世の都市經濟の理念型が個々の當時の諸都市、諸住民に對する關係と論理的には少しも異なる所は見られない。それはたゞ概念の廣狹の差に過ぎぬと云は

れ得るであらう。たゞこの事實を誤解なく把持してゐるならば前記諸學者の分類も用語の便宜上取り入れてもそれは差支へはあるまいと思ふ。而して最後にこの社會學に於ける理念型は、即ち社會學的規則と云はれるものは最も普遍的性格をもつものであることは明らかなことである。

以上に於て我々は理念型の構成性質、用途の問題を大體論じ盡したと思ふので以下かゝる理念型を手段とする文化認識の客觀性の問題に觸れてみやうと思ふ。

歴史的社會的現實態のわれわれに對して意味と意義を有するものゝ領域は暗い將來へ向つて動搖的に流轉して行く、はてしなく流れ、亂れ動く人間文化の考察に當つて形而上學の領域に踏み入ることなく尙且つ文化認識の客觀性をわれわれに保證する所以のものは何であらうか。この問題を究明せんとしたことがウエーバー科學論の全業蹟の眼目であつた。かるが故に理念型論を中心とせる彼の勞作に、社會科學的及び社會政策的認識の客觀性なる標題を與へたのである。かくてこの客觀性の問題はまたこの小論の一應の結びの形を以て現はれる。われわれは以下多くはウエーバー自身の言葉を以て簡潔にこの問題を語らせて本論を結ばうと思ふ。

「おしなべてあらゆる經驗的知識(自然科學的知識をも含めて——筆者の客觀性は與へられた實在が範疇に從つて秩序づけられるといふことにのみ基づく、その範疇は特殊の意味に於て主觀的であり、即ちわれわれの認識の前提を現はしてゐるものであり、經驗的知識がわれわれに與へることができる眞理の價値の前提と結びついてゐるものである。この眞理が價値に充ちたものとして受け取られない者には——科學的眞理の價値の信仰は一定の文化の所産であり自然所與ではない——われわれは、われわれの科學の手段を以て提供すべきなものをも持たないのである。(W. I. S. 213.)この限りに於てこれは自然科學にも文化科學にも同様に妥當する。

即ち「精神的なるもの」領域に於ける經驗的認識及び外的自然の領域に於ける經驗的認識即ちわれわれの『内』及び『外』に於ける兩過程の認識は常に概念構成の手段と結びついてをり、概念の本質は實質的兩領域に於て論理的に同様である。(W. I. S. 126.)

だが文化科學を文化科學たらしめるその先驗的前提は「我々が一定の文化或は一般に何か文化を價値に充ちたものとして(價値判斷的に——筆者見出す事ではなくて、我々が意識的に世界に對して態度を取り、それに意味を與へる能力及び意欲を付

與されてゐる文化人である。(W. I. S. 180.)といふことにある。換言すればわれわれが肯定的にまれ、否定的にまれ、價值關係的に世界に對して態度を取り得る即ち世界事象を價值理念と結合させて見る、即ち事象をその文化意義に於て觀る能力を與へられてゐるといふことが文化科學に於ける先驗的前提である。それ自體經驗的素材からは基礎づけられない此の如き價值理念の承認は決して文化科學の科學としての資格を傷けるものではない。否むしろこの價值理念の承認なしには文化科學の文化科學たる所以は見失はれてしまふであらう。價值理念と結びつく立場に従つて本質的なるものを選出しこれを一定の範疇の下に秩序づけることによつて概念的加工を施す、こゝに文化科學が成立する。

然しながらこの場合に使用する手段としての概念構成は決して自然科學のそれと同様であつてはならない。文化科學的認識に於てその客觀性を保證する概念的「手段」としてウェーバーによつて展開されたものが、とりもなほさず彼の理念型に他ならない。經驗科學の認識論的原理である「經驗的實在を思惟的に範疇に従つて秩序づける」といふこの一面に關する限りでは、自然科學も文化科學も何等選ぶところはないのであるが、この場合操作の範疇の性質は論理的に判然と異なるものである。

即ち自然科学に於ける「類概念」、「自然法則」、「自然必然性」に對して、文化科學に於ては「理念型」「規則」「客觀的可能性、十全なる因果惹起性」が對立する。

凡そ理念型を媒介とする文化認識に客觀性を與へる所以のものは、理念型の持つ意味聯關の客觀的可能性、十全なる因果惹起性にあり、謂はゞその形式的側面たる論理的完全性合理性に存するのである。理念型は一つの意味的立場の下に一定の與へられた状態に於て如何なる明證的、整合的意味聯關が追求されるかといふことを明らかならしめる手段である。かゝる手段としての理念型を媒介とする文化認識は科學的眞理の價値を承認する者にはなべて客觀的に妥當するものである。

然しながら「永久の若さを持つた科學が存在する。それは文化の永遠に進む流れによつて不斷に新しい設問にまで誘はれる歴史科學である。かゝる科學に於てはあらゆる理念型的構成體の無常性 *Vergänglichkeit*」と新らしき理念型的構成の不可避性とが課題の本質に存する。(W. I. S. 206)即ち理念型は文化問題の進展と共に常に新らしく再構成されねばならぬ、こゝではやはり *Wie der Geschichte* が問題であり、*Was der Geschichte* は問題とならない。

われわれが自己の存在そのものゝ意味を引懸けるかの最高の價値理念が送る光

明は時代と共に流轉する萬象の常に移り變る巨大なる渾沌の限られたる部分のみを照らす。他日色彩がうつろひ無反省的に取られた立場の意義がその力を失ふ時、道は薄明の中に消えてしまふ。かくて再び偉大なる文化問題の光りが更に行手に現はれてくる。大いなる文化問題の轉變と共にあらゆる科學はその立場を崩され、その概念からくりの再構成を營まねばならぬ。こゝに科學の歴史性が存在する。それは歴史的社會的實在をその文化意義に於て把握せんとするあらゆる科學になべて課せられた運命であり宿命である。

1) 高田隆馬博士：社會關係の研究 S. 80.

2) Hans Oppenheimer: Die Logik der soziologischen Begriff. S. 7. und Anm. 2.

3) W. L. S. 503, und Wirtschaft u. Gesellschaft. S. 1.

4) a. a. O. S. 13.

5) Wirtschaft u. Gesellschaft. S. 11.

6) 7). a. a. O. S. 13.

8) 9). a. a. O. S. 14.

本論中に所々で指摘したウエーバーの Atomismus、歴史と社會學との關係及び das Rationale に就いての批評は他日ものする「形式社會學批判」の中で併せて論究したいと思ふ。

元來この小論の意圖は、ウエーバーの思想を忠實に辿り、ひたすら歪曲せざらむことを希ひまた彼に對して爲された歪曲はできらる限りこれを正さむことを求めたれど、非才、更に歪曲を重ねしやもはかられず、大方の示教を得ることあらば幸甚。